


学校の生活時間を見直す

馬居政幸

 うまいまさゆき
静岡大学教授

学校の生活時間とは

「学校の生活時間を見直すなんて、小手先では無理です。ギューギュー詰めで、ヘタにいじるとはみ出ます。学校でやらなければならぬことが山盛りですから」

これは伊東市立南中学校の佐藤久美子先生が送ってくれた勤務校の日課表に書かれていた言葉である。学校現場の状況を知るために、友人の先生方に取材を試みた結果だが、改めて本稿の課題の重さを確認した。

もう一つ紹介しよう。富士宮市立大宮小学校の米津英郎先生が最近の日課表の特徴と題して送ってくれたメモである。現場の工夫が四点指摘されている。

朝礼から終礼に時間を変えた学校も増える。子どもと共にすす時間を確保するための工夫である。

これらは私が取材した静岡県内の先生方の学校にほぼ共通する内容である。学校現場にとって生活時間とは、①日課表に示される時間配分であり、②その見直しは教科以外の時間の処理の仕方を意味するようである。

佐藤先生の「小手先では無理」との言葉の意味は重い。それゆえ、限られた時間を子どものために見直す米津先生の四つの工夫の価値も大きい。だが、なぜ日課表全体の組み換えをも視野におく見直しができないのか。「ヘタにいじるとはみ出ます」との佐藤先生の指摘は理解できるが、理由はそれだけか。改めて学校の生活時間と今を生きる子どもたちとの関係問い直すことから本稿の課題を考えたい。

日課表が示す時間の特徴と問題

まず、日課表が示す時間の特徴を二点指摘したい。

その一つは時間の枠組みの自由度の低さ。小学校は四五分、中学校は五〇分を標準に、教科等の時間の時数に応じた配置を中心に日課表が組まれる。そのため、時間の見直しの選択肢の幅は非常に狭くなる。固定された授業時間を除けば、工夫の余地は各授業の前後や終了後しかない。そ

一つは朝読書の時間。落ち着いた気持ちで生活をスタートさせ、読書習慣を身に付けさせるのが目的。回数や時間は学校によって異なるが、位置づけは学習ではなく読書の時間。大宮小は週四日、八時から八時十分を当てる。

二つはドリル学習の時間。基礎基本を培う取り組みの一つとして、五時間目の授業終了後に算数の計算や漢字のプリントを行う。大宮小は週三回（月、水、金）実施。

三つは異学年集団活動（昼休み）。全学年を縦割り集団に分け、六年生をリーダーに鬼ごっこや長縄跳びなどで遊ぶ。大宮小は通学区単位で活動し、実施は月一回。

四つは職員打ち合わせの時間。数年前までは朝の時間（月、水、金）に行ったが、現在は月曜日と木曜日の二回。

の代表が先の四つの工夫であろう。もちろん、個々の授業時間内で、子どもたちの集中力を喚起するための見直しは可能である。多くの指導案には分単位で授業の流れが記載され、先生方の工夫を読みとれる。だがその場合も、授業全体の時間枠は固定したままである。この点では米津先生の工夫も同じである。ともに器となる時間ではなく、そのなかに盛る内容を変える作業である。子どもからみれば決められた時間に従うことにはかわりはない。

このことは逆に、時間枠さえ守れば、その中で行う内容は自由であることを示唆する。これが第二の特徴である。

学校では、時間とその時間の使い方が分けて考えられ、時数調整のために教科の入れ替えも許される。授業の内容によつては、二つの時間枠の使用も可能になる。ただし、子どもからみればどうなるか。時間枠だけでなく内容までも、子ども個々の興味関心や体調とかかわりなく受容すること求められる。それだけではない。小学校では一年から六年まで、成長度も学習内容も異なるはずなのに、同一の生活時間が等しく課せられる。中学校でも高校でも、子どもの成長や内容の高度化とはかかわりなく繰り返される。

このような学校の生活時間の淵源は、明治期の近代学校誕生時にまで遡れる。戦後の教育改革から六十年を経て

超えたが、今はその半分。ただし世帯の中の子どもの数は、一人、二人、三人の割合は変わっていない。一・二九という合計特殊出生率は、女性が産む子どもの数ではなく、子どもを産む女性が減ったから。家庭の中の子どもではなく、子どものいる家庭の割合が半減した。この変化の意味をわかりやすく示すために作成したのが図4。どこの家庭にも四～五人の子どものもがいた団塊の世代、二人になって異年齢の友はいなくなったが同じ年の友は近所にいた団塊ジュニア、その友をも失った現在の子どもたち。この変化がもたらす子どもの育ちの問題に学校はどこまで配慮してきたか。量の変化には学級と学校の減少で対応したが、質の変化にはどうか。異年齢集団までは

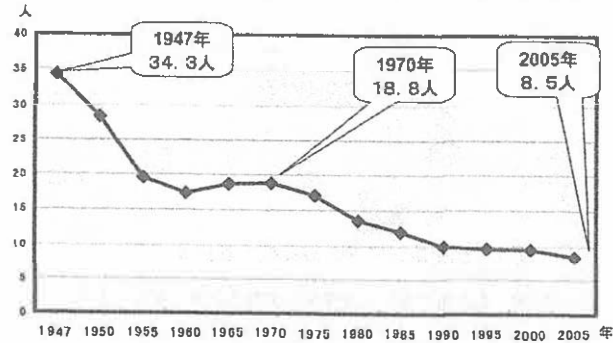


図2 普通出生率 (人口千人対) (2)

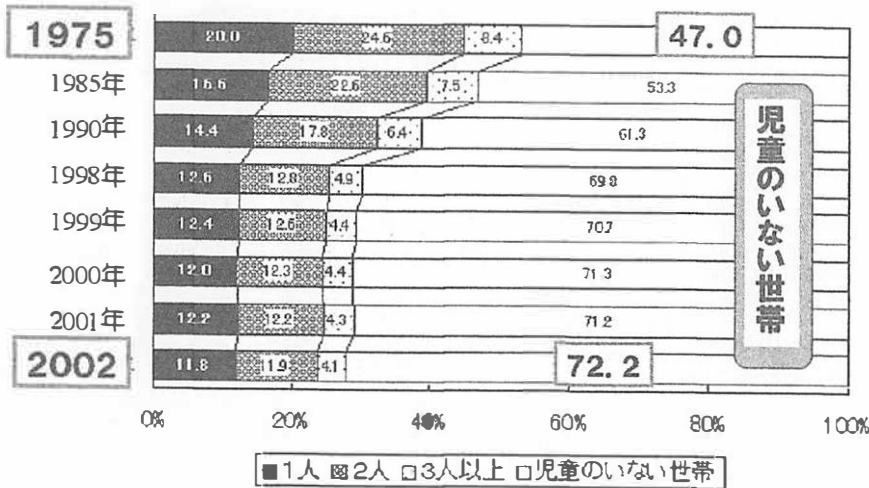


図3 児童有 (児童数) 無別にみた世帯数の構成割合の年次推移 (3)

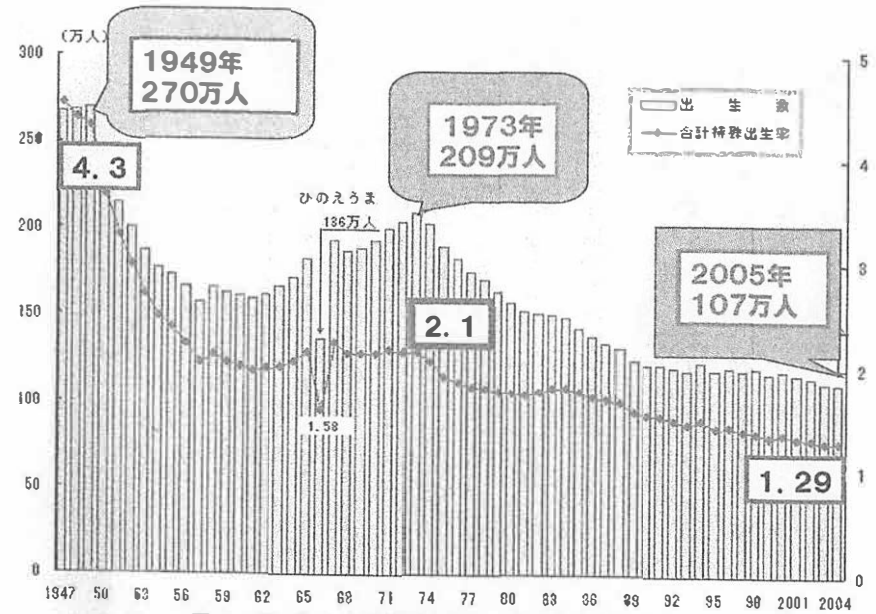


図1 出生数と合計特殊出生率の移り変わり (1) (2)

変化していない。この間に子どもとその生きる世界が大きく変わり、出生率の低下により、日本の社会制度全体の組み換えが必要な人口減少時代に入ったにもかかわらず。子どもは現在と未来に生きる人たちである。もし、過去を継続する学校の時間が日本の未来が求める時間と異なるものであれば、その強制は子どもたちの未来を塞ぐことになる。学校の生活時間の見直しの方向は、子どもとその生きる世界の特徴を問うことから求めるべきではないか。

少子化の現実が強いる子どもの変化

まず量の変化を確認しよう。図1を見てほしい。団塊の世代と総称される一九四九年生まれは二七〇万人、そのジュニアの一九七三年生まれは二〇九万人だが、昨年はわずかに一〇七万人。団塊ジュニアの五割、団塊の世代との対比では四割にも満たない出生数である。

質の変化はどうか。図2の普通出生率 (人口千人中の出生数) をみると三四・三人 (一九四七年・団塊の世代) ↓ 一八・八人 (一九七〇年・団塊ジュニア) ↓ 八・五人 (二〇〇五年・少子世代) と団塊の世代の四分の一である。この変化の意味をより明確に示すのが図3。一九七五年 (団塊ジュニア) では一八歳以下の子どもがいる世帯が五割を

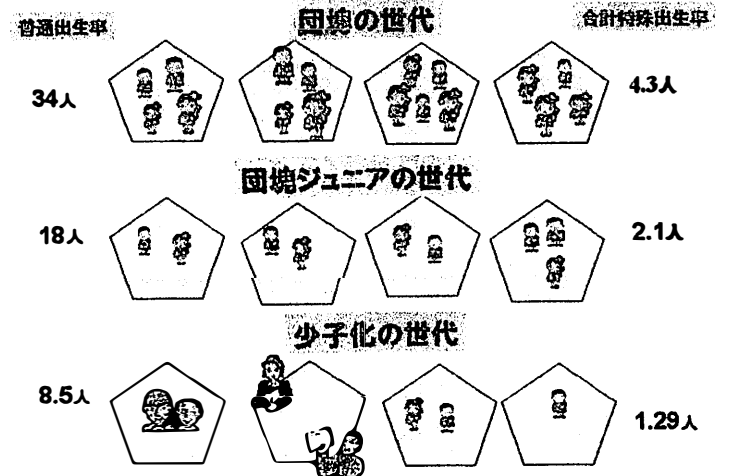


図4 出生率と子どもの変化のモデル

表1 2001年→2050年 出生数の推計と実際の出生数の比較 (単位 万人) (4)

	2001	2002	2003	2004	2005	2010	2020	2030	2040	2050
高位推計	121	121	121	121	120	118	107	99	96	90
中位推計	119	118	117	115	114	105	91	83	75	67
低位推計	117	115	112	109	106	91	73	64	51	43
実出生数	117	115	112	111	107	?	?	?	?	?

比較すると、各種統計の基礎数値になる中位推計ではなく低位推計(太字)しか生まれていないことがわかる。その先にあるのは現在の半分以下にまで減少する推計値。これが人口減少社会における学校と子どもたちの未来である。

人口減少社会に応じた生活時間の見直しを

団塊の世代は高度経済成長すなわち日本の工業化を担った人たち。一定時間内にさまざまな製品を次々と生産することを求められた。四五分の枠内で多様な教科を次々と処理する学校の生活時間と同じ構造である。加えて、彼ら彼女らの多くは自然に従って変化する時間を生きている農村に生まれた。数の多さは独自の時間を生む集団の基

に対応しても、共に育つ仲間を失った子どもたちの課題を自覚できているだろうか。

実はこの問題はこれで終わらない。表1を見てほしい。

二〇〇〇年の推計とこの五年間の実際の出生数(太字)を

が、学校の生活時間という隠れたカリキュラムの成果であった。

だが、現在の日本の一次産業従事者は5%以下。八割近い三次産業という名の多種多様な職種に応じた時間が錯綜する社会に変化した。コンビニとIT機器が象徴する時間の世界を子どもたちは生きねばならない。他方、数の少なさとは異なる時を生きる友と交わる機会を奪い、個々の閉じた生活で得た時の感覚のみで学校に入ってくる。このような子どもたちに必要な学校の生活時間を二点指摘したい。一つは時間の共有化を教育課程上に位置づけること。少子社会に育つ子どもには、時間の共有化自体が学校教育の課題になる。少なくとも小学校では、教科と同様に子どもの成長(学年進行)に即した日課表の時間枠の変更を試みて欲しい。特別なことではない。低学年担任の先生方は子どもに応じた工夫をしているはず。それを明確にし、他学年の教員が認め、日課表に位置づけ、親にその意義を理解させて欲しい。同一空間に多様な時間を生きる人が並存し、国を超えて人が移動する社会になればなるほど、基準となる時間の共有化が課題になるからである。

二つは時間を操作する学習が可能な日課表。グローバルなサイバー空間では世界中の時間が同時進行する。他方、人口減少社会は超高齢社会で介護は成長産業。そこでは一人ひとりに応じた時間設計が求められる。このように未来

の時間が多様である以上、共有化と同時に状況の変化に応じて時間を組み換える力も必要になる。さらに、個別化を避けえない少子社会に育つ人たちの自立に必要なのは個性や能力に応じた職種の判断力。その基盤の育成は時の共有化と多様化の感覚を培うことから始まる。小↓中↑高と子どもの成長に応じて、時間枠と使用法を学習者に判断させる日課表を考案してほしい。これも特別なことではなく総合的な学習で実践済みのはず。他教科の時数も加えて、まず月一回、時間枠のない日を用意して欲しい。指導要領には標準時数とともに「各学校において」は「単位時間や時間割を「適切」に「創意工夫」をとある。道は開いている。

【文献】

- (1) 国立社会保険・人口問題研究所の少子化情報HP「出生数及び合計特殊出生率の推移」<http://www.jpss.go.jp/syoushika/saisaku/hm/111b1.htm>
- (2) 厚生労働省HP「平成17年 人口動態統計の年間推計」<http://www.mhlw.go.jp/foukei/saikin/hw/k/tyosa/k/tyosa02/1-4.html>
- (3) 厚生労働省HP「平成14年 国民生活基礎調査の概況」<http://www.mhlw.go.jp/foukei/saikin/hw/k/tyosa/k/tyosa02/1-4.html>
- (4) 国立社会保険・人口問題研究所HP「日本の将来推計人口」http://www.jpss.go.jp/syoushika/foukei/Mokuyu/1Japan/J-list_14.asp?chap=0

特集 授業に集中できない子

集中の心理学

授業に集中できない子の心理と指導

小野瀬雅人 2
菅野 純 11

子どもをひきつける教師——学習スタイルを大転換させる指導

明石 要一 20

学校の生活時間を見直す

馬居 政幸 26

集中力を育む授業——シユタイナー教育の実践から

秦理 絵子 32

多動傾向の目立つ子がクラスにいるとき

片桐 力 38

子どもの集中力を育てる家庭——睡眠リズムから考える

鈴木 みゆき 44

授業への集中力を高める学級の人間関係

手塚 光善 51

子どもが集中する授業づくり

教科の導入として「総合的な学習の時間」を活用する

藤巻 稔 67

遊びや小さな劇を楽しみながら学ぶ

山崎 隆夫 72

手や体をつかった活動をする

谷口 治子 77

こんなとき、どうかかわる？

授業中立ち歩く

浅川 早苗 84

私語が多い

西山 和孝 88

姿勢が悪い

正津 信一 93

ボーッとしている

沖 郁子 97

◆データから考える
小学生の暴力行為の増加をどうみるか

芳賀 明子 101

【特別寄稿】他人の心がわかるとはどういうことか

——脳科学の視点から

須藤 珠水 108
茂木 健一郎

「インタビュー クローズ・アップ！」 子どもたちと地球環境を考える

気象予報士
平井 信行 56

新連載

ニーズ・ベース・アプローチによる 教室の中の「気がかりな子」への支援 [3] アスペルガー症候群など自閉傾向のある子の違い	品川 裕香 120
実験的教育論 [3] 自然農法に学ぶ人間信頼	町田 宗鳳 114

連載

食育のヒント——子どもが元気になるメニュー [最終回] “命の大切さ”を理解する	大村 直己 64
学級経営に生かすカウンセリング [最終回] 教師として生きる ——充実した教育実践をするためには	河村 茂雄 143

リレー連載

親と教師のカウンセリングルーム 軽度発達障害が疑われる児童と保護者への対応	塚田 裕子 127
--	-----------

忍	沢崎 達夫 50
親の声・子どもの声	八島 和代 66
教室だより	横 忠夫 83
保健室から	岸 昌枝 107
今月の本棚	132
【自己理解ワークブック】 / 松下美知子 【多元化する「能力」と日本社会】 / 耳塚寛明	
編集後記	深谷 和子 144

